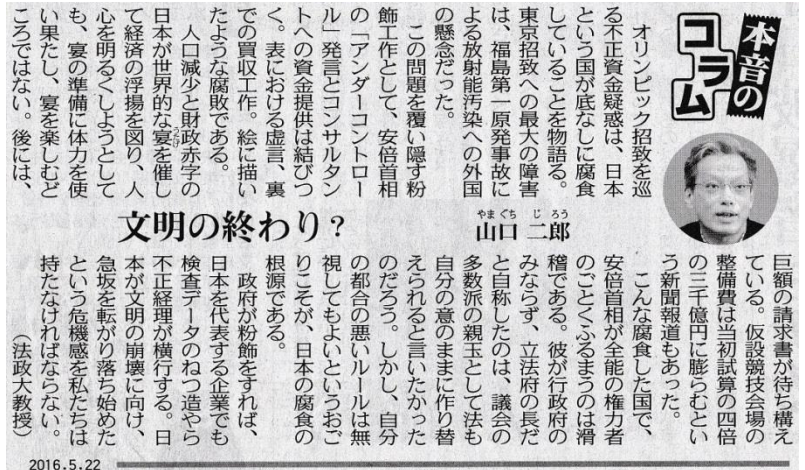


東日本大震災から5年余の現実：備忘録ないしは切り抜き帳(その31)

[2016年5月25日(水)]

しばらく熊本地震のことを考えているうちに新聞記事や読み物が溜まってしまった。伊勢志摩サミットや夏の参議院選挙が近づくとつれて、世の中の動きは次第に騒がしくなっているように思えてならない。そのうちの主要なものを以下に取り上げておきたい。

○右の山口二郎氏のコラム(東京新聞本音のコラム)には、安倍政権が2020年の東京オリンピック開催のために無理を重ねる度にあちらこちらからボロが出て、世の中がどんどんおかしな方向に向かっていく様子がよく現れている。最初のオリンピック招致の段階で安倍首相自らが福島第一原発のことを「アンダーコントロール」とウソをついたのが始まりで、その後、枚挙にいとまがないほどのゴタゴタが続いた後で出てきたのがコンサルタントへの不正資金疑惑であった。オリンピックの問題に限らず、最近の大変良くない傾向として、不正を働いたり暴言を吐いたりした政府首脳部や政財界のリーダー達が引責辞任することがめっきり少なくなったのも、恐らくはトップを見習ってのことであろう。舛添都知事の厚顔無恥ぶりなど正に“文明の終わり”を感じざるを得ない。



本音のコラム
文明の終わり?
 山口 二郎
 この問題を覆い隠す粉飾工作として、安倍首相の「アンダーコントロール」発言とコンサルタン卜への資金提供は結びつく。表における虚言、裏での買収工作。絵に描いたような腐敗である。人口減少と財政赤字の日本が世界的な憂を催して経済の浮揚を図り、人心を明るくしようとしても、裏の準備に体力を使い果たし、裏を押しむところではない。後には、巨額の請求書が待ち構えている。仮設競技会場の整備費は当初試算の四倍の三千億円に膨らむという新聞報道もあった。こんな腐食した国で、安倍首相が全能の権力者としてふるまうのは滑稽である。彼が行政府のみならず、立法府の長だとか自称したのは、議会の多数派の親玉として法も自分の意のままに作り替えられると言いたかったのだろ。しかし、自分の都合の悪いルールは無視してもよいというおごりこそが、日本の腐食の根源である。政府が粉飾をすれば、日本を代表する企業でも検査データのねつ造やら不正経理が横行する。日本が文明の崩壊に向ける急坂を転がり落ち始めたという危機感を私たちは持たなければならぬ。(法政大教授)

○文藝春秋6月号は久しぶりに読み応えがあった。まず注目したのはホセ・ムヒカ氏へのインタビュー「日本人への警告」と熊本地震に関するドキュメント「熊本日新聞編集局一被災1週間の記録」であったが、それ以外にも立花隆氏が新宿ゴールデン街に開いていた「ガルガンチュア立花」と云うバーにまつわる話、磯田道史氏による「穀田屋十三郎」執筆にまつわる後日談、地球科学者・大河内直彦氏の「シチリア余話」の中の、約600万年前にジブラルタル海峡が地殻変動によって閉じ、地中海が干上がったために大量の塩が沈殿した話、まさか投法の村田兆治氏がプロ野球の始球式で131キロのストレートを投げ、66歳とは思えないと感心されたが、本人は納得していないと云う話など、興味は尽きなかった。



東京新聞
 科学者は自覚せよ
 技術は戦争にも使われる
 ノーベル賞 益川さんインタビュー

○5月24日の東京新聞1面トップは『科学者は自覚せよ』との大見出しで、益川敏英氏のインタビュー記事を掲載していた。その冒頭部分を引用させて頂くと「(益川氏は) 科学技術は常に政府に軍事利用される恐れがあり、科学者にはその自覚が求められると訴えた。オバマ米大統領が27日、被爆地の広島を訪問することに関し、原爆を開発した米国の科学者たちが71年前、投下に反対しながら防げなかつ



筆洗
 同僚から「きまの筆洗はおもろかった」といわれたとする。喜べぬ、むしろ驚かす。「ほめ言葉最大の敵とせよ」の処世訓とは無縁である。ひっかかるのは「きまの」という部分がある▼曲がった心は「きまの」が強調されて聞こえる。たすれば「いづもはひどいが、きまに限っては」の意であり、悪口ではないかとおぼえる。日本語は難い▼「きまの」とは「すべやる」。腕まくりが似合いそうなのは、この日本語の怪しさを指摘したのが米光氏の遺体遺棄事件をめぐって安倍首相と会談した、翁長知事である。「政府の」で「きまの」は「すべやる」といふ言葉は、できないことはずべてやらないとしか聞かれない▼「きまの」この種の事件にせよ、基地問題全体にせよ、結局、解決の糸口さえつかぬ政府の対応のせいである。できなことはできない。それもしれないが、沖繩の意向を端から「きまの」と決めてきた要請がその言葉を疑わす▼翁長知事が要請したオバマ大統領との面談について、菅官房長官は「外交は中央政府で協議するのが当然ではないか」と述べた。政府にはこれでも「きまの」とに分難されるらしい▼かくして、あの日本語は沖繩県民の目には「期待するな、何も改善しない」と冷たく翻訳されて聞かせる。もはや言葉が通じない。2016.5.24

本音のコラム
別の地位協定
 沖繩県つるま市の女性遺棄事件。報道によると「最悪のタイミングだ」と述べた閣僚がいたらしい。沖繩は怒っている。沖繩タイムズ21日(日)の社説は「日米両政府の迅速な対応がどこか芝居じみて見えるのは、「最悪のタイミング」という言葉に象徴されるように、(略)沖繩の人々に寄り添う姿勢が感じられないからだ」と書く。誰だよ、こんな暴言を吐いた「閣僚」って、と思っていたのだが、某民放キー局十九日のニューズ原稿をウェブサイトで読んで絶句した。(アメリカのオバマ大統領が歴史的に広島を訪問する直前のタイミング)

グというだけに、日本政府は困惑しています。ここまでは前フリで、以下、政治記者のリポートが続く。「政府・与党内からは「本当に最悪のタイミングだ」という声が相次いでいます。政府としては、オバマ大統領の広島訪問で悲惨な歴史を乗り越えた日米の同盟関係を世界にアピールしようとしていた矢先の事件で、友好ムードに水を差された状況です」

そうですか。わかった。閣僚の一人二人の問題じゃない。政府目線の報道を疑問も持たずに流す局。これが東京のスタンダードなのだ。翁長知事は首相に「日米地位協定の下では日本国の独立は神話であると思いませんか」と語ったという。本土と沖繩の間にもある別の地位協定。嘆かわしい。(文芸評論家)

た例を挙げ『科学技術が戦争に使われるのか、平和利用されるのかは紙一重。技術は一度、公になれば軍事利用はたやすくできる』と語った。(途中略) 米国の原爆開発計画“マンハッタン計画”を主導したオッペンハイマーは米国が核を持てば抑止力になると信じていた。それは戦争を未然に防ぐ手段としてだった。しかし、当時の米政府は科学者の反対意見を押し切って日本に投下した。科学者たちはナイーブだった。自分たちがつくったのだから、言うことを聞いてくれると思ったが、政府はそういうものではない。米国の政治家は、広島・長崎が目標ではなく、原爆の開発を進めていたソ連を念頭に置いていた。米国は原爆を誇示する必要があった。(途中略) 日本で最近、軍事技術の開発に向けて政府が大学や研究機関と連携を深めている。科学者に問われる責任については『自分だけの世界にこもってはいけない。世の中がどう動いているか、もっと知るべきだ』と強調した。」とある。本当にその通りであろう。

○同じ新聞の第2面には、沖縄県の翁長雄志知事が安倍首相との会談で発言した要旨が掲載されていた。再び主要部分を引用させて頂く。「若く尊い命が奪われる非人間的な事件が発生した。…このような凶悪事件が発生し、県民の生命・財産を守る立場の知事として激しい憤りとやるせなさを感じる。沖縄は70年以上、過重な基地負担を強いられてきた。今回の事件は、国土面積の約0.6%の沖縄県に在日米軍専用施設の約74%に及ぶ広大な米軍基地が存在し、県民が基地と隣り合わせの生活を余儀なくされていることに大きな要因がある。安倍内閣は『できることは全てやる』といつも言うが『できないことは全てやらない』との意味にしか聞こえない。米軍普天間飛行場の問題に関し『県民に寄り添う』という言葉も、実感として一度も感じられない。このような事件が二度と起きないように、米軍および日米両政府の責任で、日米地位協定の見直しを含め、実効性のある抜本的対策を講ずるよう強く求める。今の地位協定の下では日本の独立は神話だ。このことはオバマ米大統領に伝えていただきたい。オバマ氏と直接話す機会を与えてほしい」との発言が持つ意味は極めて大きい。前ページに掲げさせて頂いた“筆洗”氏も政府への皮肉を込めながら翁長発言を支持している。そして、本日の“本音のコラム”では、斎藤美奈子も本気で怒っている。「そうですか。わかったよ。閣僚の一人二人の問題じゃない。政府目線の報道を疑問も持たずに流す(某民放キー)局。これが東京のスタンダードなのだ。…本土と沖縄の間にもある別の地位協定。嘆かわしい。」

○本日の夕刊で真っ先に目に入ったのは『熊本地震 義援金届かず』のニュースであった。報道(東京新聞)によれば「熊本地震の義援金のうち、熊本県が25市町村に一次配布した計約7億5千万円のほとんどが、配分から2週間以上たっても被災者に届いていない。24日時点で支給したのは1世帯10万円のみ。地震による熊本、大分両県の建物被害は10万棟を超え、住宅の被害調査が進まず、罹災証明書の発行が追い付いていないのが主な要因だ」とのことである。東日本大震災の際に日本赤十字社に問い合わせたことは、このような義援金の配布は地方自治体に一括してゲタを預けた段階で任務を終えると云うことであった。被災者の手元に届いたことを見届けるまで責任をもって面倒をみてくれるようなシステムが開発されない限り、義援金を託す人々の真意は被災者に伝わらないのではないと思われるが、如何なものでしょうか。

[2016年5月31日(火)]

○先週のビッグニュースは伊勢志摩サミット(G7)と、それに付随して実現したオバマ大統領の広島訪問であった。安倍首相はG7の場で、世界経済がリーマンショック前に似た危機に瀕しており積極的な財政出動が必要であるとの合意を得ようと画策したようであるが、そう上手くは行かなかった。かえってアベノミクスの失敗が浮き彫りになったようであるが、そのことには全く触れずに消費税率引き上げを2年半も先送りしてしまった。平気で前言を翻しているのに誰も咎めることができないのだろうか。



東京新聞5月28日第2面(左)、東京新聞同日1面トップに掲載されたロイター・共同の写真(右)

3 総合 11版S 2016年(平成28年)5月30日(月曜日) 東

世論調査 オバマ氏訪問98%評価 「広島見て何を感じた」 被爆者ら慎重な見方も

共同通信社の全国電話世論調査で、オバマ米大統領の広島訪問を「よかった」と評価した回答が98.0%と圧倒的だった。ただ、広島、長崎の被爆者の中には「前向きに捉える声もある一方で」「きれいな事と終わらせてはいけない」と慎重な見方が少なくない。米退役軍人団体からも「ほろ苦い」との感想が漏れ、複雑な心境をつかわれてきた。

広島県原爆被害者団体協議会(県被爆団)の清水弘士さん(82)は、オバマ氏の原爆資料館見学がわずか1分程度だったことに憤り、「一番聞きかたつたのは、被爆の実態を何を感じたのか。用意してきた演説では本当の思いは伝わってこない。きれいな事と終わらせてはいい」と話す。

父が被爆者で反核運動を続けてきた森澤香子さん(82)は「訪問は百恵あつて一利なし。日本中が喜びを見て、海外の人には奇妙に思うのではないかと」と指摘した。

一方、広島市の被爆者池田精子さん(82)は「米国内で反対意見があったのに来てくれた。勇気がいった」と語る。一方、米国内では「千白が今年の戦没将兵記念日(メモリアルデー)USAトゥデイ紙によると、ある団体幹部は「記念日を前に、多くの人が『きれいな事と終わらせてはいい』と語った」と話した(共同通信)。

マニラの法小面の被害者代表の法小面(コビータ)は「オバマ氏の来日演説は、被爆者に対する敬意を示している」と評価したが、一方で「47件、110人の被害者に対する謝罪がなかった」と指摘した。

オバマ氏が今回の演説で核兵器廃絶に向けた具体的な道筋を示さなかったことに物足りなさを覚えた。被爆二世の平野伸人さん(82)は「オバマ氏が長崎入りしなかつたことで、広島に世界の注目が集まり、長崎は忘れ去られていくだろう」と危機感を募らせた。

「今後みんなを、訪問の意義を冷静に振り返ることが必要だ」と訴えた。一方、米国内では、これまで原爆展開催などに猛反発してきた米退役軍人団体が「紛争のない世界は全員が共有すべき展望だ」と指摘するにせよ、訪問や演説への強い批判は出ていない。

東京新聞5月30日に取り上げられたオバマ氏の広島訪問に対する被爆者の意見

○オバマ米大統領の広島訪問は概ね好感をもって迎えられたように思われる。広島スピーチ冒頭の「71年前、雲一つない明るい朝、空から死が落ちてきて、世界は変わった(death fell from the sky and the world was changed)」との表現は無責任ではないか、原爆資料館など現地で受けた感想が全く述べられていないではないか、などの批判もあるようであるが、それは“ないものねだり”と云うものであろう。それより、日本人には決して真似のできないセンスの良さを感じたのは、例の『折り鶴』をさりげなく準備されていたことであつた。気配りの利く側近の仕事と云うことがあつたのかも知れないが、それとても全く非難される筋合いのものではないはずである。ごく限られた時間をこれだけ有効に活用されたオバマ大統領には敬意を表したい。それに比べて、写真で横に立っておられる御仁は、この僅かの時間の段取りのために、どれほどの時間を浪費されたことであろうか。

2016年5月31日 文責：瀬尾和大